



医療安全

NEWS



《2024年10月号》

今、求められる「仕事と介護の両立支援」 ～『ビジネスケアラー』2030年には約318万人に～

■ 迫り来る「2025年問題」

2025年、「団塊の世代」が75歳以上となり、日本は国民の5人に1人が後期高齢者という超高齢化社会を迎えます。高齢化や生産年齢人口の減少が進む中、仕事をしながら家族の介護に従事する『ビジネスケアラー』の増加が注目されています。

■ 『ビジネスケアラー』の現状

2023年に経済産業省が公表した将来推計によれば、2030年には家族介護者約833万人に対して、ビジネスケアラーはその約4割（約318万人）に達して、ビジネスケアラーの離職や労働生産性の低下に伴う経済損失は、約9兆円に上る見込みとされています。仕事と介護の両立困難の影響は、個人的なものにとどまらず、社会全体で取り組むべき課題と言えます。

■ 仕事と介護の両立における課題

ビジネスケアラーには、

- ①自身の介護状況開示への消極性
- ②介護の状況が個々人によって多様かつ可変であり、将来予測が困難
- ③肉体的負担に加えた精神的負担の増加

という3つの特徴があると言われています。

キャリアへの影響を懸念して介護を周囲に伝えないことも多く、負担の大きさは個々で異なり、変化します。また、介護の発生前後で疲労や精神的負担により、「約3割のパフォーマンス低下がある」という調査結果も出ています。

■ 仕事と介護の両立支援として求められる取り組み

2025年4月1日に施行される『育児・介護休職法』改正では、「仕事と介護の両立支援制度の強化」が掲げられており、家族の介護に直面した従業員に対して個別の周知・意向確認を行うことや、従業員への早期の情報提供、雇用環境の整備が事業主に義務付けられています。また、経済産業省は、全ての職場が取り組むべきアクションとして、「経営層のコミットメント」「実態の把握」「情報発信」の3つのステップを提示しています。ビジネスケアラーの増大等の背景を考慮した介護と仕事の両立支援の推進を経営層主導で進めていきましょう。

<参考>

経済産業省『仕事と介護の両立支援に関する経営者向けガイドライン』

ポイント

- ☐ 仕事と介護の両立をしている「ビジネスケアラー」は、2030年時点で家族介護者の約4割の約318万人、経済損失は約9兆円と見込まれている。
- ☐ 仕事と介護の両立困難は、個人の課題ではなく、社会全体で取り組むべき問題である。

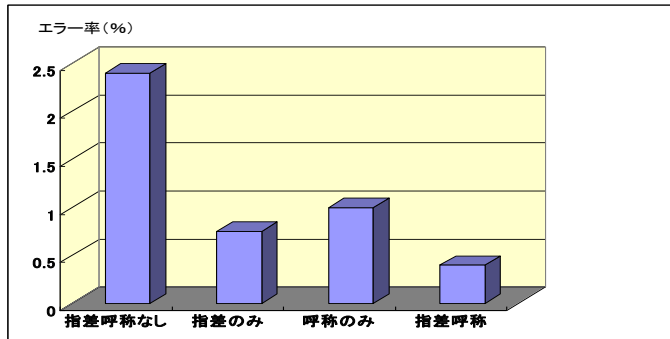
今月の医療安全Q & A

Q 指差し呼称をしないスタッフがいます。理由を聞くと「恥ずかしいから」「面倒だから」などの理由があるようです。どのようにすれば実施してもらえるようになりますか。

A 指差し呼称は、元々鉄道業界で行なわれていた安全確認ですが、今でも航空業、運輸業、建設業、製造業等で行われています¹⁾。

指差し呼称が必要とされている根拠がわかる、ある実験結果があります²⁾。

実験結果によると、指差し呼称は全くやらないのと比べ、エラー率が1/6となっています。エラー予防のためには、指差し呼称で作業をした方が効果的だと分かります。



※画面表示に応じたボタンを押す作業を一人当たり100回×4種類行ったときのエラー発生率

図 指差呼称のエラー防止効果の室内実験による検証（芳賀ら1996）

●一人の作業にさせない

「指差し呼称をするように」と指導されても、いざとなるとどうしても、「恥ずかしい」「めんどくさい」と思う人もいます。一人で指差し呼称をするのは、孤独な作業と感じ、やりづらさを感じるかもしれません。

特に新人は、指差し呼称自体に不慣れであり、一連の確認動作が正しく行われているか不安を抱えつつ行なう人います。先輩が「一緒に確認しようか」「私も確認してもらいたいから一緒に見てもらってもいいかな」と自分も確認してもらいたい、手を貸してほしいと依頼をするような声をかければ、新人も安堵して作業に取りかかれるかもしれません。そして先輩が指差し呼称をする姿を見て、作業確認のノウハウを覚え、少しずつ不安感を減らせるのではないのでしょうか。とはいえ、経験者であっても指差し呼称を行っていない人もいます。

●ベテランにこそ有効

医療の知識や物事の理解は、経験で培われるものも多く、新人ではスルーしてしまうようなエラーを経験者だからこそ気付ける事もあります。そして、「私失敗しないので！」といった精神にもなるかもしれません。が、「人は誰でも間違える（エラーを起こす可能性がある）」ものです。新人の頃よりはエラーを起こしにくくなったとしても、多重課題が増えていく中で、慣れた作業を無意識のうちにいきなり、いわゆる凡ミスを起こしがちです。

慣れた作業でも意識的な確認作業が必要で、指差し呼称は新人のみではなく、多重課題の多い作業で集中しにくい状況での経験者こそ有効です。

●周りは意外と見て（聞いて）いるもの

前述の実験結果からわかるように指差し呼称は、指で差す「視覚」と、呼称する「聴覚」から情報をとらえ認識することで効果があります。例えば、指示票の誤りがあったとして、指差しした内容を、視覚の他に自分の耳で聞くことで誤りに気付くことがありますし、偶然他者が耳にして誤りに気付く場面もある事でしょう。

患者さんも、確認作業を無言でやられるよりも、指差し呼称をしている姿を見ると安心される事でしょう。

指差し呼称を敬遠しがちの方もおられるでしょうが、看護師人生で自分を守る行為と理解が出来ていれば、「はづかしい」「めんどくさい」という意識は減少するのではないのでしょうか。病院全体で指差し呼称を習慣化出来るよう環境を整え、事故予防につなげていくことも重要です。

【引用文献】

1) 厚生労働省 \職場の安全を応援する情報発信サイト/ 職場の安全サイト 安全衛生キーワード 指差し呼称
https://anzeninfo.mhlw.go.jp/yougo/yougo72_1.html (2024.05.24確認)

2) 芳賀 繁・赤塚 肇・白戸 智明 (1996):「指差し呼称」のエラー防止効果の室内実験による検証,産業・組織心理学研究, 9, p.107-114

<情報提供元>

東京海上日動メディカルサービス株式会社
メディカルリスクマネジメント室

<http://tms.mrmhsp.net/>

◆許可なく、転送・転載・複写はご遠慮願います。
◆作成時の情報で掲載しています。最新の情報をご確認ください。